

東京国立博物館ニュース

TOKYO NATIONAL MUSEUM NEWS

2026年 秋号

| vol. 786 |

シリーズ 東博コレクション展を探究!

金剛力士立像②

今号の表紙

五彩鳳凰文皿

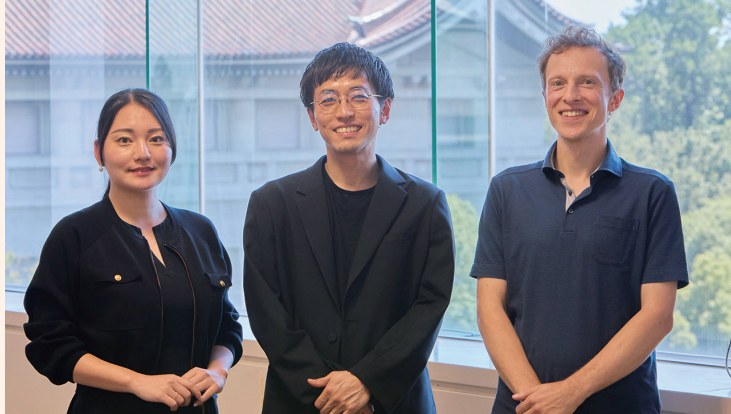


創立154年目を迎えた東京国立博物館では、現在リブランディング※1を進めています。なぜ今、リブランディングなのか。そして未来に向けてどんなパーパス※2をつくらしているのか。昨年から続く職員へのヒアリングやワークショップ、分科会※3での議論を通じてみてきた課題や可能性について、3名が語りあいます。

※1: 社会の変化にあわせて組織の価値や魅力を再構築する取り組み

※2: 組織が存在する意義や社会に果たす役割を示すもの

※3: 部署横断で構成されたリブランディングを検討するチーム



博物館は、社会のために 何ができるのか。

—東京国立博物館のリブランディング—

経営企画室
きよはら りな
清原 里菜

東京国立博物館 参与
くどう たくま
工藤 拓真

国際部 国際交流課
ミウォシュ・ヴォズニ

なぜ今

リブランディングなのか
その背景と課題意識とは

工藤 東京国立博物館のリブランディングを考えるにあたって僕が職員の皆さんとお話しして感じたのは、一般的な企業や組織と比べると、長い歴史のなかで当たり前のように存在してきたことで、「変わる」という感覚が持ちにくい、むしろ「変えたらいけないのではないか」という意識のほうが大きいという印象でした。

清原 私も「当館は外を向き切れていないのではないか」と感じるがありました。展示を

ご覧いただいた先に、どうなっていきたいのかという視点がみえにくく、収集する、展示する、守る、ということだけではなく、今回のリブランディングでさらに「歩踏み込んで」「当館は人々に、社会に何を提供していくのか」を考えていく必要があると思っています。

ヴォズニ そうですね。世界的にみても博物館や美術館は開かれた場所になってきていますが、当

館はまだ美術や歴史に詳しくないと入りづらいイメージがあります。もっと開かれた場所となり、多様な人々が楽しめるようになれば、社会における価値も上がる。社会に求められている組織にならないと、存在し続けることが難しくなりますよね。そういう意味でもリブランディングは当館にとって絶対に必要だと思います。



工藤 国際社会における日本のポジショニングも、経済で世界上位にいた頃とは違ってきているので、博物館や美術館、日本の文化や歴史が背負うものも相対的に大きくなっています。このタイミングで東京国立博物館がリブランディングをする意味のひとつには、そういうこともあるのではないかと思います。国内外から来館された方に、「さすが日本だ」「日本ってすごい」「そんな感動をいかに伝えていけるか。そこが5年後、10年後に試されますね。」

調査や議論のプロセスを通じて
何がみえてきたのか

ヴォズニ 最初の頃の分科会では、「東京国立博物館とはどういうところか」を話していましたが、そこにこだわると現状維持になってしまうことに気



づき、工藤さんからのアドバースもあり、私たちが何者であるかではなく、これからどう変わっていくべきか、「進化へのアクションを起こすパーパスをつくる」と方向転換しました。

清原 確かに、議論のなかではどうしても歴史や収蔵品数が当館の強みだという話に終始しがちで、これにとどまらない当館の価値をみだし、共有することには難しさがありました。ただ、職員の皆さんがそれぞれ「こういう理由で私は東京国立博物館が好き」といふ考えを持っていて、それは当館のとてもいいところだということにあらためて気づかれました。

工藤 そうですね。ピュアに作品が好きという方が純度高くいるからこそ、強みだと思います。というのも、伝統と革新という言葉がありますが、今残っている作品はできた当時は「革新」で「ぶつとんだもの」であつたはずで、職員の皆さんはそうした作品が好き、つまり本来イノベティブなことが好きということですから、「作品を愛する気持ち」と「どう変えていくのか」はじつはかなり近いところにあると思うのです。それがこれからもっともつと近づいていくことで、よりアクティブな進化につながっていくのだらうなと皆さんの議論をお聞きしながら感じていました。

パーパスについてのこだわりと未来に描く想い

ヴォズニ 海外の博物館・美術館のパーパスは長い文章ですが、当館のパーパスはもっと簡潔で、オリジナルリティがあつてキャッチコピーとしても響くようなものになりたいと考えました。でもとても難しく、工藤さんと一緒に必死に考えているところです(笑)。

清原 入りづらい、敷居が高いといった声に対して、社会に対して何ができるのかを伝えるパーパスをつくって公開することで、当館のこれからの姿勢を表明したいです。そのためには皆が反対しない見解にまとめるのではなくて、博物館は何のためにあるのかとか、なぜ大事なのかを突き詰めてさまざまな異なる意見を集約していくことが鍵かなと思うて取り組んでいます。

工藤 東京国立博物館のこれからを言語化する難しさですね。そうして無事にパーパスが決まった後にも、ヴォズニさんと清原さんたちには各部署に広げていく役割もあると思います。今後何かを実施する過程で迷った時に、パーパスが判断基準に資するかがポイントですね。「私たちこうやって決めたよね、

だったらこうやるべきだよ」という基準になっていることが、パーパスが絵に描いた餅ではなくしっかり現場に根づいている状態だと思います。

清原 そうですね。新たな取り組みをはじめるときにパーパスの要素を入れるとか。数か年計画をつくる際にパーパスに合致した内容がチェックしていくことができればいいなと思っています。

ヴォズニ 私は、来館者と非来館者が何を求めているか、どのような価値を提供すれば社会にとってもっと意義ある存在になれるかを徹底的にリサーチして、それをベースにパーパスに照らした戦略をつくるようなこともしていきたいなと考えています。

工藤 外野席にいる僕がみても、東京国立博物館は今こんなにもさまざまな変化があるのかと驚くほどなので、組織のなかではそれに伴う苦労も非常に多いと思います。変化への恐怖も高まっていくでしょうが、これからも積極的により多くの議論を続けていくことで、変化を止めることなく進んでいくのではないのでしょうか。来館者の皆様には「これからの東京国立博物館にぜひ注目してください。大いに期待してください」といいたいです。僕自身とても期待しています。



博物館でアジアの旅 カラフルアジア

東洋館 9月15日(火)～11月8日(日)

秋の恒例企画「博物館でアジアの旅」。今年は、色に注目して作品の秘密を探求する旅のご案内です。色とりどりの工芸や書画の背景にある、色彩の価値観やその技術的挑戦をご紹介します。



東洋館8室
『秘密集会』阿閼金剛三十二尊曼荼羅(『ヴァジュラーヴァリー』曼荼羅集のうち2番)

中国 清時代・18世紀
展示期間：10月20日(火)～11月29日(日)

清の康熙帝の皇子がつくらせたチベット仏教の曼荼羅です。発色のよい高価な絵具がふんだんに使われています



東洋館9室
多色ガラス燭台

展示期間：9月15日(火)～11月29日(日)

「乾隆年製」銘 中国 清時代・乾隆年間(1736～95)
この燭台は、蠟燭を刺す金属製の棒を芯棒にして、色とりどりのガラスでつくられたパーツを積み重ねたものです

東洋館3室
ウジャト眼の垂飾

展示期間：9月15日(火)～11月8日(日)

エジプト 末期王朝時代・前664年～前332年頃
百瀬治氏・富美子氏寄贈
厄災を退け、健康や再生をもたらす御守りで、青く発色させたガラス質のやきものでできています

東洋館インクルーシブ・プロジェクト

「東洋館インクルーシブ・プロジェクト」では、視覚に障害がある方も楽しめる展示を目指し、当事者と色彩に関する勉強会を重ねてきました。その成果をもとに、今年は研究員の解説がたっぷり聴ける音声ガイドをさらに充実させます。また、鑑賞中の対話を促す「おしゃべりフリー」の取り組みやワークショップ等も予定しています。

特別展 内山晋コレクション受贈記念 本館A室 9月29日(火)～12月20日(日)

歌川広重 江戸のベストアングル

歌川広重は、街道を旅するように描いた「東海道五拾三次」や「木曾海道六拾九次」、四季折々の江戸をとらえた「名所江戸百景」などの風景画で知られます。本展では、吉原の妓楼から外を眺める愛らしい猫を描いた「名所江戸百景 浅草田雨西の町詣」をはじめ、広重の代表作の数々をご紹介します。広重がとらえた「江戸のベストアングル」を、ぜひご堪能ください。村瀬可奈(美術部門絵画班)

本展は、以下のスケジュールで展示作品がすべて入れ替わります。

- 1期：9月29日(火)～10月25日(日)
- 2期：10月27日(火)～11月23日(月・祝)
- 3期：11月25日(水)～12月20日(日)

名所江戸百景
浅草田雨西の町詣

歌川広重筆 江戸時代・安政4年(1857)11月
展示期間：11月25日(水)～12月20日(日)




 五彩鳳凰文皿 中国・漳州窯
 明時代・17世紀 横河惇氏寄贈

鮮烈な赤が映える鳳凰文皿、新たに当館のコレクションへ

特集「令和7(2025)年度新収品」では、令和7年度に新たに当館のコレクションに加わった文化財のうち、寄贈品、および購入品のなかから主だったものをご紹介します。

「五彩鳳凰文皿」は、径22センチメートルほどの、シンプルな丸い平皿です。見込みには、中央に片足で立つ1羽の鳳凰が、そのまわりには太陽や牡丹の花、竹、雲などがのびやかに描かれています。絵付けは鮮やかな赤色が中心で、緑と藍色を用いて部分的に色を添えています。

本作品は、明時代の末、17世紀に現在の中国福建省南東部に広がった漳州窯で焼かれたものです。この地域では、明時代に世界各地へ輸出され、一世を風靡した景德鎮窯の模倣品が量産されました。現在の江西省北東部に位置する景德鎮窯は質の高い白磁の生産で知られていますが、漳州窯の製品は白磁ではなく、鉄分や夾雑物を含んだ灰茶色の素地に白い釉薬をたっぷりかけており、器に厚みがあって手に取るとずっしりとしています。絵付けも、文様の配置や構成、モチーフは景德鎮窯の製品に共通するものですが、緻密で精確な表現の景德鎮窯器と

比べて、自由で豪放大胆な筆遣いにより親しみやすい印象を受けます。

日本では江戸時代以来、この種の器を「呉州(須)手」とよんできました。「呉州」とは一説に、現在の江蘇省あたりに位置した古い国名の「呉」に由来し、南方を意味するものといわれます。日本に伝わった呉州手には、本作品のように懷石に用いられる組物の皿や径40センチメートルほどの大皿のほか、鉢、壺、花入、小さな香合など、さまざまな種類をみることができます。本作品の縁にみられるように、赤く塗りつぶした丸文が配されたものは「赤玉」とよばれて、特に珍重されました。ベンガラ(酸化鉄)による赤い上絵具の発色は力強く鮮烈であり、江戸時代の日本人の目にも魅力的に映ったことでしょう。

この皿は、当館を代表する東洋陶磁コレクションの寄贈者として知られる建築家横河民輔(1864～1945)の旧藏品です。茶の湯をたしなんだ下枝夫人のために、手元に残しておいたものとみられます。このたび民輔の孫にあたる惇氏によって寄贈され、世界に誇る横河コレクションに加わることになりました。三笠景子(工芸部門陶芸班)

東博コレクション展を深掘りする連載企画
2026年夏号より4回にわたり、金剛力士立像の魅力を多角的に探ります

東博コレクション展を代表する圧倒的な存在感を放つ金剛力士立像。一度は大破したこの仏像は、約2年かけて本格修理が行われました。

シリーズ第2回目は当館の児島研究員が、本作品の修理や使用された木材について解説します。

現状を長く後世へ 文化財としての仏像修理の大原則

仏像の修理といっても、お寺や個人所有の仏像をつくられた当時の姿に戻す修理とは違い、文化財としての仏像修理は現状維持が大原則です。手を加える箇所は必要最小限にとどめ、現在の状態を後世に長く伝えていくことが基本で、同時にオリジナル部分の尊重にも重きを置いています。幾度か修理を繰り返している仏像は、時にオリジナルにない色や装飾が施されていることもあるので、その場合は以前の修理の痕跡を剥がし、なるべくオリジナルの状態に戻す修理も行います。こうした仏像修理の方針は、こちらの金剛力士立像の修理を行った、公益財団法人美術院の創設者である岡倉天心と新納忠之介が明治時代に定めたもので、以来現在まで仏像修理は基本的にこの考えで行われています。

約2年間にわたる本格修理

損傷の状態にもよりますが、仏像の修理の大半は表面修理で、状態の悪いものは解体して組み上げる本格修理が必要になります。金剛力士立像も、もととお寺の門で風雨にさらされていたため傷みが激しく、台風により大破したバラバラになっていましたが、美術院にて本格的な解体修理を行うことになったのです。美術院の技師による修理は約2年をかけて行われました。工程としては、いったんすべてを解体し、ひとつずつ使える部材と使えない部材を判断しながら組み上げます。現状維持を基本としつつも、自立に支障が出るほどの欠損部分は補強し、台座は拡張して安定感を補いました。

表からみえない真実をしるには 解体修理が唯一のチャンス

日本の古美術は宗教的礼拝の対象になっている作品も多く、破壊検査はほとんどできません。そのため、表面からはわからないことを調べる機会としては解体修理がほぼ唯一のチャンスです。今回の金剛力士立像でも、使用木材の種類を調べる「樹種同定調査」を京都大学が、

卍形の修理の流れ

1 解体(卍形)



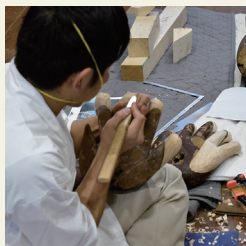
修理のために、すべての部材を解体します

2 組み上げ (体幹部)



解体した部材をあわせて、不足箇所や補強が必要な箇所を確認します

3 補作



指先などの欠損部を補い、像が制作された時代にあった雰囲気損なわないようにします



こ じま だい すけ 児島大輔

保存科学グループ
保存修復チームリーダー
(美術部門彫刻班)

「運慶」[「空海と真言の名宝」展]*等の特別展を担当。いつか南極へ行って、コウテイペンギンのヒナにあうのが夢。

*特別展「運慶 祈りの空間—興福寺北円堂」
(2025年9月9日(火)～11月30日(日))、
弘法大師生誕1250年記念
特別展「空海と真言の名宝」
(2026年7月14日(火)～9月6日(日))



第1回はこちら



こんごうきしりゅうぞう
金剛力士立像
平安時代・12世紀
通年展示

平安時代以降、数々の戦火を免れたものの、台風で大破した後にはお寺も

時を越え、多くの人の手や 願いとともに、今ここに

美術史的・彫刻史的な観点からの平安時代後半、12世紀末の作であるとの見立てが裏付けられたことになりました。

年代を調べる「年輪年代測定調査」を奈良文化財研究所が実施しました。木材の調査では、この像は大半がヒノキ材で、後補材としてはコウヤマキや「ゴウマツ」が、杣にはヤブツバキが使われていることと、ヒノキ材の年輪の一番新しいものが1173年に形成されたものだということがわかりました。木の年代別制作年とはいえませんが、他の木材の年代も矛盾しなかったため、この像が平安時代末期に伐採された材を使ってつくられたものと推察できます。この調査によって、

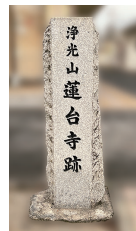
なくなり、いつとき誰からも守られない存在となっていた金剛力士立像。今こうして丹念に修理された姿で、多くの皆様にご覧いただけていることは、この像にとっても、この像を手放さざるを得なかった人々にとっても喜ばしいことだろうと思っています。本来はお寺の門にあるべきですが、こうして博物館にあるからこそ、雨や風にさらされることなく、その姿を長く後世に伝えることができず。当館でご覧いただく際にはぜひ、その造形のすばらしさとともに、どこをどう修理したのかわからないほどのみごとに技術や、人の手仕事の温もりにも思いを巡らせていただけたらうれしいです。

金剛力士立像に思いを馳せて

本像が安置されていた
滋賀県栗東市の蓮台寺*ゆかりの方に、
思い出を伺いました。

台風の被害で原形をとどめない部材が保管されるなか、比較的可たちが残っていた頭部顔面だけがみえていた情景が思い起こされます。1970年に仮組みの金剛力士立像が京都国立博物館で展示された際、地元民は「こんな立派な像が蓮台寺に…」と驚きました。東京国立博物館に金剛力士立像が収蔵されたと聞いたときは、「仁王さんがいつまでも残るんだ」と本当にうれしかったです。地域の誇りとして、多くの方々、そして次の世代の方々にもぜひしてもらいたいです。

*現在、建物は残っていません



蓮台寺跡地の石碑

金剛力士立像の故郷である浄光山(じょうこうざん)蓮台寺は、最澄による789年の創建といわれ、かつては七堂伽藍(しちどうがらん)を備えた大寺院でした。その後、応仁の乱や寛永の火災などで建物が焼失し、残った仁王門も1934年の室戸(むろと)台風によって倒壊。現在は跡地に石碑と案内板が設置されています。

次回は、金剛力士立像の 搬入・展示について探求！

6 完成



現状を維持しながら、今後100年間の安定を見据えた修理が完了しました

※修理画像は公益財団法人美術院提供

5 古色(彩色)



新たに補った部材を彩色し、周囲と違和感なく、なじむよう上げます

4 組み上げ(頭部)



頭部を取りつけ、角度を調整します。わずかな違いが仏像の表情や印象を大きく左右します

博物館の活動は、展示や催し物、文化財の調査研究や保存、情報アーカイブなど、多岐にわたります。当館の運営に関わる仕事を、さまざまな角度からご紹介します。



おぎ とう まさ ひろ
荻堂 正博
展示企画グループ
デザインチーム(総合部門デザイン班)

音が好きで近年はフィールドレコーディングにはまっています。

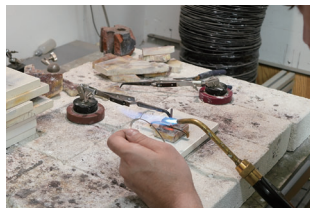
安全で美しい展示を追求する

ミュージアムで、しゃがみこんだり天井をみ上げたり、不思議な動きをしている人がいたら、それは展示デザイナーかもしれません。展示は、なにを、どこに、どう置いて、どう照らすかで、意味やみえ方が全く変わります。そのような「印象」や「居心地」を演出して、博物館を訪れた人に驚きや、緊張、安らぎといった体験を整えるのがデザインチームの役割です。展示のデザインとひとことであっても実際の業務は多岐にわたります。展示空間の設計、作品を収める展示ケースの設計、作品を乗せる展示台、作品や空間を照らすライティング、展示室内のグラフィックなどの展示に関わるものから、ポスター、チラシ、チケットといった広報物のデザイン、さらに館内の案内サイン、来館者が快適に過ごせる休憩用家具の選定なども行っています。

こうした幅広い業務に携わるなかで、最近個人的に関心を持っているのが、作品を支えるための展示用の支持具「マウント」です。マウントは、作品の位置や角度を演出し、地震等による転倒を防止する、安全かつ美しく展示するための基礎的な存在です。海外の主要なミュージアムにはマウント製作の専門職員が在籍し、館内に金属、木材、アクリルなどを加工できる本格的な工房を備えていることが一般的ですが、日本はまだその体制や技術においておくれをとっている状況にあります。そこで、最先端の現場を学ぶため、アメリカのスミソニアン国立アジア美術館へ技術研修に行ってきました。現地のすばらしい設備と高度な技術に触れた経験は、今後の展示づくりへの大きなヒントになりそうです。



3Dプリンターで製作したモックアップを使って、広重展(→4ページ)の照明テストを行っている様子



スミソニアン国立アジア美術館の工房でのマウント製作風景

学生とのコミュニケーションを考える —キャンパスメンバーズ制度を伝える広報の試み—



キャンパスメンバーズ
ページ

キャンパスメンバーズ制度は、大学・短期大学・高等専門学校等を対象とした会員制度です。ご入会いただいた学校の学生や教職員の皆様に当館の文化財や展示、活動に対する理解を深めていただくことを目的とし、東博コレクション展を無料、一部の特別展は無料もしくは割引料金でご観覧いただけます。

情報発信や収集手段が多様化するなか、広報室では、より多くの学生の皆様に本制度をしていただきご利用いただくには、どのようなコミュニケーションツールがよいかを検討しました。

まず取り組んだのは、情報を届けるための工夫です。大学への関心が高まる4月の入学時期に本制度についてのSNS投稿を行ったところ、想定以上の反応があり、大学関係者の方からは、リポストしていただきました。ウェブサイトは学生向けと大学



2026年4月Xへの投稿。通常の投稿と比較して、13～24歳のエンゲージメントの割合が高い傾向がみられました



今年の3月まで学生だった新入職員へのヒアリングの様子

教務担当者向けのページを分けて、それぞれが必要な情報を取得しやすい構成に修正しました。

また、学生の皆様の声をしり今後の広報に活かしていくため、本制度についてのアンケートやヒアリングをはじめました。会員校の教務担当者向けアンケートでは、「制度をしらない」「忙しくて時間がない」といった課題に加え、学内で活用しやすいデジタル広報素材の要望も寄せられました。インターン生や最近まで学生だった新入職員へのヒアリングでは、「無料でみられるのはうれしい」「自分の学校が会員校とすぐにわかるようにしてほしい」といった率直な意見を得られました。

さらに、当館では大学で講師をしている職員も多く、授業内で本制度の紹介をしていることもわかり、当館ならではの接点を活用した周知の重要性を再認識しました。

今後もキャンパスメンバーズ校とコミュニケーションを図りながら、学生の皆様に当館を訪れたいような魅力的な情報を、教職員の皆様には学内での制度周知に活用いただける情報をお届けしていきます。どうぞご期待ください。

は がわ はるか

長谷川悠（広報室）

会員校の学生は広重展 無料！

会員校の学生の方は、特別展 内山晋コレクション 受贈記念「歌川広重 江戸のベストアングル」(→4ページ)を無料でご覧いただけます(要学生証)。詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。

読者が選んだ 「私のお気に入り」②

本館 高円宮コレクション室 ね つけ たか まどのみや 根付 高円宮コレクション

本コーナーでは、読者の皆様から寄せられたお気に入りの作品を取り上げて、担当研究員が解説します。

今回は「根付 高円宮コレクション」。

「作品一つひとつにストーリーがある」「超絶技巧でつくられた小さな世界の美しさに魅せられる」「古いものも新しいものも、それぞれのよさがある」など、根付の世界のとりこになってしまったファンも多い人気のコレクションです。



ふくしま おさむ
福島 修

列品管理グループ 登録チームリーダー（工芸部門漆工班）

「高円宮コレクション」をみて、私ははじめて「現代根付」なるものの存在をしりました。根付には国宝もなく、広く認知されている分野とはいえません。当館の展示室で私と同じように根付の存在をしり、その造形に魅せられる方々が増えるとうれしいです。

江戸時代初め、巾着や印籠などを着物の帯から提げるスタイルが流行しました。この提げ物の紐に取りつけて、帯に留めるための道具が「根付」です。明治になってからも一部の作家たちは制作を続け、1970年代頃にはそれらが「古根付」の模倣ではなく、現代の独立した作家が生み出す「現代根付」であることが意識されるようになります。

当館の高円宮コレクションの根付は、故・高円宮憲仁親王殿下が収集された現代根付を中心とするコレクションです。もともとは、久子妃殿下が学生の頃に海外の美術館で根付をご覧になって関心を持たれ、のちに妃殿下が憲仁殿下を根付の店へお連れしたことがはじまりとお聞かしています。憲仁殿下は収集だけではなく、根付師のところへ足を運び、時に課題を与えることで、根付の発展を支えてくれました。根付師の側でも両殿下をモチーフとした作品を制作しており、右上の「かえるの合唱」では、中央で冠をかぶっている蛙が憲仁殿下、裏側で舌を出しているへびは巳年の妃殿下をイメージされているのだそうです。これについて、妃殿下は「へびはかえるをたべちゃうから」と楽しそうに笑っていたりしました。色漆塗りで、かえるの目は螺鈿



かえるの合唱^{がっしや} 針谷絹代作
平成12年(2000) 高円宮コレクション
展示期間：10月27日(火)～2027年1月24日(日)

細工。白漆の使用は現代根付ならではですね。ちなみに、かえるは77匹いるらしいです。私も数えてみました。がいつも途中でわからなくなってしまうです。

根付は、江戸時代に練り上げられた庶民感覚の発露です。神話からかえるまで、何でもかんでも造形化されるので、芸術性と諧謔を織り交ぜた底のしれない豊かさがあります。特に現代根付は、古根付の「ひねり」に現代の感覚が加わり、身近に感じられるところが魅力です。タイトルをみて「なるほど!」と気づかされるのもおもしろいです。ぜひ肩の力を抜いて楽しんでいただけたらと思います。

仁王鬼角力木彫彩色根付 線刻銘「法橋宝山作」
江戸時代・19世紀 郷誠之助氏寄贈
本館20室

展示期間：展示中～11月29日(日)

仁王と鬼が相撲をとっているユニークな作品。高さ15センチメートルと根付としては大きめではあるものの、等身大の彫像のような迫力とスケール感です。双方譲らず、グッと力の入った表情や張り詰めた筋肉、息づかいまでも聞こえてきそうな臨場感が、みごとに表現されています。



ミュージアムショップ

当館ミュージアムショップで販売中です。
多様なコレクションをお楽しみください。

『根付 高円宮コレクション』1,467円(税込)
『続 根付 高円宮コレクション』2,150円(税込)



お気に入り作品募集

当館所蔵作品のなかからお気に入りを教えてください。詳しくは11ページの特別展チケットプレゼントコーナーをご覧ください。



東京国立博物館ミュージアムショップ MUSEUM SHOP

もつとワクワク、
もつとトーハク

お目当ての展示を心ゆくまで堪能した後の
もうひとつのお楽しみ、館内のショップめぐり。
皆様のお越しをお待ちしています。



ONLINE SHOP
<https://www.tnm-shop.jp/>



トーハク ミュージアムショップ



東洋館店



正門プラザ店

本店(本館1階)

この秋、レストラン・カフェがリニューアルします！



ガーデンカフェ



THE RESTAURANT
東京国立博物館



鯨会席 おく乃

2026年8月28日 東洋館エリア レストラン・カフェ 開業

2026年9月30日 法隆寺宝物館エリア 鯨会席 開業予定



詳しくはレストラン公式HP
よりご確認ください
<https://tnm-restaurant.jp>

※広告掲載についてのお問合せは東京国立博物館広報室まで

東京国立博物館ニュース第786号 2026年9月20日発行(年4回発行)

編集/東京国立博物館 広報室 ©東京国立博物館 発行/東京国立博物館 〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9 制作/株式会社 メディア グラフィックス

ウェブサイト <https://www.tnm.jp/> 独立行政法人国立文化財機構ウェブサイト <https://www.nich.go.jp/>